

現代日本の舞踊家の トレーニングを探るⅡ — 舞踏の場合 土方巽を中心にして —

原 田 奈名子

研究目的・方法：様々な様相を呈する現代舞踊の中で'60年頃からの新しい舞踊は一般に“舞踏”と称される。舞踏は土方巽がバレエやモダン・ダンスを経たうえで、'59年5月に日本芸術舞踊協会主催第6回新人舞踊公演と、同年9月に650 EXPERIENCEの会で「禁色」を発表、この作品をもって発生とされる⁽¹⁾ バレエやモダン・ダンスが欧米からの発生に対して、日本人による初めての現代舞踊の発生であった。

舞踊にとって、肉体をどのように捉えるかはその舞踊の性格を決定し、トレーニングを規定すると考える。現代日本の舞踊家のトレーニングについて — モダン・ダンスを中心にして — に於いて各々の舞踊家のトレーニングを対象として「肉体の訓練法」と「表現技術」の相互関係をみた⁽²⁾ 本研究はこれらを踏まえ、土方巽の舞踏合宿'77年5月1日～5日、7月21日～25日のトレーニングの特徴を明らかにするものである。加えて、他の舞踏家のトレーニングを資料⁽³⁾とし、舞踏のトレーニングの構造を推察したい。

結果と考察⁽⁴⁾：

1. 肉体的・歩

第1の練習〈歩〉では、〈歩〉とは「ひっかかる自分を発見」し、「納得のいかない己を連れ出す」ことである。そのことは「目で見ようとせず・耳で聞こうとせず・体の中に歩いていって懐しいものにたちあって超越すること」で可能となる。〈歩行〉とは、「寸法を運ぶこと」「死体を運ぶこと」である。「歩こうという願いが歩」かせ、「命がやや前面に傾斜して、それに歩く姿がついてゆくこと」である、と語られる。即ち、ここに土方巽の基本的態度として、自己の肉体の否定・肉体は生きながら既に死んだものとしての位置づけが示される。

2. 《描写》のテーマ・方法上の持論

次に《描写》のテーマで〈ハスの花〉〈恐竜の首〉〈盲男〉等の題材で展開された。

2-1 方法上の持論その1 「人間であることを疑ってみる」と「ひっかかる自分」「納得のいかない己」とは「体の中に何か変な生き物を飼っている」からである、と語られる。例えば「長く病気で寝ている人の床上げの時には、かつて人間であったとはとても思えないような動き方をする。」

それは「何か変な生き物」即ちそれを〈恐竜の首〉としたならば、働いているのは〈恐竜の首〉であり、病人のからだは動かされているのである。「何か変な生き物」は、〈ハスの花〉や〈鏡〉等、動物、植物、鉱物のこともある。

2-2 《描写》・〈ハスの花〉 〈ハスの花〉はそれに光があたると〈童女〉に変わり、〈童女〉の頭上で〈小鳥がチッ〉と鳴くと、鳴き声が頭蓋骨に浸み込む。その鳥が笑うような光になめられると、〈子供〉になったり〈一つ目怪じゅう〉になったり、〈痴呆〉になったりし、そして又〈ハスの花〉になるという。

2-3 方法上の持論その2 このような次々の《描写》は変身を可能たらしめる。《描写》とは、「それらを存在せしめているもの」 — 「成立条件」を熟知し、「何も表現しようと思わず、ただある状態を提示すること」であり、肉体訓練とは、「成立条件にどこまでもかかわって自分の肉体を熟知すること」であると持論が示される。

2-4 《描写》・〈盲男〉 これらのことは、〈盲男〉に於いては、男が薄かな光をたよりに杖を持つ手、指の先端、額、鼻、目、足の裏を眼にし見ようとする願望のために薄笑いを浮べたような顔や口が乾いて大きく口をあけることになると、描写される。

2-5 《描写》・別の視点での練習 《描写》の力を養うには、次のような方法も行われる。 — 2人づつ向い合い、相互に相手の顔を観察しあい、一方が他方の顔を再現し合う — という方法である。顔の何を観察するか、 — 即ち成立条件にかかわること — を大きく問われる方法である。

3. 《神経・感覚》のテーマ

第3の練習は舞踏論と《神経・感覚》をテーマとして展開された。

3-1 舞踏観 「自分の気持、心は所詮人に明かすことができない。それは宇宙の生成構造が人に明かすことができない構造になっているから。子供は光を求める。眠りたくない。電球をつかみたい。火事が起こればいいと思う。情念、攻め合うもの、離反するものが平面上に渦になると、確かに上昇するものだ。舞踏とは性急なもの、極端から極端へ。舞踊家とは、窒息する時空間にやすりをかけ、平板に身を委ねない者。」 「人間を止めたい・舞踏がみえてきた。」彼の舞踏では、まず伝速の意識を捨てることからはじまるとみられる。

3-2 《神経・感覚》・〈歩行〉 先に行った〈歩行〉-1は、「人を殺してきたばかりだから」と神経・感覚の側から条件づけられ、次のように描写される。「足の下にはカミソリ・天界に針・頭上に硫酸の並々入った器を載せ」た状態で、後髪を引かれるけれど、しかしその場に立ち止まらない。だから背中に目玉をつける。全身を緊張さ

せ、背後に神経を集め、眼にする、と深化された歩行となる。

3-3 〈光〉の介在する題材 このテーマは具体からより抽象性の強い題材で展開される。《神経・感覚》を微細に働かせ〈根本的に立った時〉その成立条件を多面的把握をさせるべく〈光のマントを着た少女〉→〈光でできた鳥・シギ〉→〈光そのもの〉→〈光の上の綱渡り・貴婦人〉→〈柳〉→〈乾燥〉→〈空・虫〉と展開され、光の性質が「光が皮膚にあたると皮膚が衰弱し、光に敏感になる」と飛躍の脈絡をもって運ばれる。

具体的には、〈光のマントを着た少女〉は、「手には硫酸の入った器を持ち、口の中にはバラの花が、足裏には女郎花の花が、耳の中にはタンポポの花が咲く」となるべく歩行が進められる。極度の緊張と弛緩が肉体の中に同時に存在し、手以外のからだは消えかけるといふ。

3-4 〈体を消してゆく〉方法・〈柳〉 上述の〈光……〉の他にも〈子供〉→〈鹿の角〉、〈幽霊〉等の展開がある。これらは神経を出していくことで体を消して変身を企図する。〈柳〉の場合、「柳は全体がおぼろにかすみ、しじれていて、ぼんやり広がった状態」であるから、まず「脛の裏に1本の神経を出す。」それは柳の一枝である。同様に「こめかみ・耳の後・脇の下・肩の付け根・膝、踝から1本の神経を出し、5本、10本、千本、万本、何万本もの神経を出した時、体の輪郭はぼんやり拡散して、〈体が消える〉ことになるといふ。

4. 《無数の神経に解体される》のテーマ

第4の練習は《神経、感覚》のテーマから更に発展して《無数の神経に解体される》というテーマで展開される。

《無数の神経に解体される》中において、更に明確なフォームを提示すべく「神経の触角」を働かせ「空間に神経の糸を残す」ことで、「密度、拡散、熱」が生じる、と語られる。

4-1 〈柳〉→〈乾燥〉→〈空、虫〉 具体的には、壁などの現前の障害物があると、そこで終りを感じるが、しかし空間には無数の壁がある。〈柳〉が空間の壁と合体して、体の中にコンクリートを流し込み、そこに風が吹くと、「ひび割れて平面化した空間」即ち〈乾燥〉になる。— 拡散。「壁から剥離すると、しみに変わる。」— 密度。密度は「危機感を故意に自らに引っぱってくること」「追いつめること」によって、空洞の中よりはじまる。しみのように小さくなって高い所を見、かつ遠くをみると、〈空、虫〉になると流れが運ばれる。

4-2 《無数の神経に解体される》・他の視点の練習 《無数の神経に解体されるもの》の描写の力を養う方法には、一見無理な物同士の合体を

図する方法がある。例えば動物と動物 — 尺取虫とネズミ・くらげと山あらし — や、それらを更に花と合体させるなどである。しかしかかわった存在、人間が、成立条件への多面的な把握へ到らない状態では、〈子供の驚きの眼のような神経〉で〈観察に観察を重ねて、それらを存在せしめているものの生理にわけ入り〉描写しようという方法をとるのである。

5. 《部屋》のテーマ

最終的には、《部屋》という題名のもとに公演形式で舞台上で演じられるようにはこばれる。

《部屋》についてはあらかじめ即興練習が行われ、《部屋》とはの問いかけと、音への対し方・照明への対し方、又「直接触れるのではなく、迂回せよ、その回路こそ問題だ」等の指示があり、動きが生れるべくして生みだされるように示される。

まとめ：以上の課程をまとめてみると、初期における単一の具体的題材〈ハスの花〉等から、抽象的な題材〈光〉へ、更に飛躍の操作による変身〈柳〉→〈乾燥〉→〈空、虫〉へとより抽象化したのはこびで展開されている。又、最終のテーマ《部屋》では、個々の展開を布石として、総集的な展開が行われるとみられよう。

土方巽の舞踏は、他への伝達の否定を前提として、肉体は自己の生きている肉体でありながら、すでに死んだものとして捉え、肉体を変身させることである。それは表現ではなく、成立条件にかかわった肉体の、「ただある状態を提示すること」である。肉体訓練とは「成立条件にどこまでもかかわって、自分の肉体を熟知することである。従って、彼のトレーニングは肉体と表現の不可分の状況を明示し、全体のはこびという点からみると、小さな全体を展開しながら、より大きな全体へ到ろうとする課程とがみられた。外見の特異性に比し、細密なと思われるこの展開は、舞踏に到る以前の彼の個人史 — バレエやモダン・ダンス等のトレーニング体験に潜んでいるともみられよう⁶⁾今日の近代合理主義の世に、肉体と表現の不可分な状況は、人間存在そのものをもって行うパフォーマンスという始源の世界へたちもどって人間と舞踊を再生させようとしたのではないだろうか。パフォーマンスの中の肉体と精神の限らない問題について、今後も追求を続けたい。

- (1) 日本舞踊事典、郡司正勝、1975、「行為と肉体」市川雅、1972、p.11、舞踊の系譜、国吉和子、舞踊学7、p.41。
- (2) 昭和51年度東京教育大学修士論文筆者。
- (3) 第18回舞踊学会、発表資料Ⅲ。
- (4) 同上、資料Ⅱ。
- (5) 同上、資料Ⅳ。